

生物・文化多様性とその世代間継承  
—アンデスにおけるインカの知の復活に学ぶ—

稲村哲也

はじめに—万博によせて

2005年、本学のキャンパスに隣接する海上の森で愛・地球博が開催された。1851年にロンドンで始まった万博は、「科学技術のショーケース」として発展したが、一方で常に「文化」の展示という側面を持ち、それは時代を反映してきた。戦前は、帝国主義拡大と歩調を合わせ、その文化展示には、植民地支配正当化の趣向が凝らされた。たとえば1889年のパリ博では、植民地集落が建設され、先住民の生きた生活展示が行われた。そうした展示は、人類の文化が未開から文明への進化し、ヨーロッパの近代文明こそがその頂点であるとする「文化進化主義」理論によって、裏付けられた。

戦後になって、万博の展示は大きく変わった。では、愛知万博における文化展示はどのような特徴をもっていたと言えるのだろうか。愛知万博のテーマは「自然の叡知」、すなわち「環境」であった。外国館の中でも、いわゆる先進諸国は、科学技術を駆使して「環境」というコンセプトの表現しようと工夫しながら、かなりてこずっていたという印象がある。途上国の展示には、最初から科学技術を使おうという意図は無く、固有の伝統文化を展示したものが多かった。同時に多彩な民族イベントも開催され、万博は文化の多様性を表現する場でもあった。

国連館の展示には、（環境を象徴的に表す）「生物多様性」と「文化多様性」とが対となる二本柱として提示された。その背景には、1992年の環境サミット以後、ユネスコが訴えてきた「生物多様性」と「文化多様性」の急激な喪失という問題がある。ただし、万博全体として、外国館の展示に、環境と文化の双方を明確に結びつけて紹介した展示はあまり見られなかった。しかしながら、結果として、「環境」と「文化の多様性」が万博の2大テーマとなり、地域において、その関心が高まったことは意義深い。今後、愛知万博の理念と経験を活かして、環境と文化の重要性とその相互関係を再確認し、理念を継承し、実践を継続していくことが重要である。

そこで、本稿では、「文化多様性」がなぜ大切かという基本的な前提を、「環境」との関係という視点から論じたい。結論的にいえば、生物（環境）の多様性が文化の多様性を育み、逆に、「環境との共生」の叡知が埋め込まれた伝統文化こそが生物の多様性を維持する（環境を保全する）、ということである。

本稿では、中央アンデスの事例をとりあげるが、まず、環境に関わる文化人類学的研究

において、中央アンデス（以後、アンデスと略す）をとりあげることの意義をまずのべておきたい。アンデスは、低緯度に位置する高地としての共通の特徴を有している。すなわち、その地域の低地には熱帯の環境があり、そこから高さを増すにつれてしだいに寒冷になってゆくことから、極めて多様な環境が形成されていることである。たとえば、山本紀夫（山本1992）が調査を行ったアンデス東斜面のマルカパタでは、一つのコミュニティが熱帯から氷雪地帯までを占め、一つの家族が標高千メートルから5千メートルまでの高さを利用する例もある。標高4千メートルまでは、高さ、標高に応じて様々な作物を作り、標高4千メートルを超える高地部ではラクダ科の家畜であるリヤマとアルパカを飼育している。高低差4千メートル以上の環境が数十キロの範囲内に凝縮されていることになり、そこでは、地球上の居住可能な環境のほとんどを一日で体験することも不可能ではない。

実際、アンデスやヒマラヤの人びとは、多様な自然環境に適応し、共生しながら、それを最大限に利用する生活様式を成り立たせてきた。本稿では、主として、中央アンデスで古代インカ時代に行われていた、野生動物の保全・利用システム「チャク」の現代における復活をとりあげ、環境をめぐる伝統的な「在来の知（indigenous knowledge）」とその現代的意義をとりあげるについて考察したい。

## 1 インカの伝統知「チャク」—野生動物の保全・利用とその再生

### <パンパ・ガレーラス保護区>

チャクは、インカ時代に皇帝の指揮のもとに行われていた野生動物の追い込み猟のことである。大勢の人々がビクーニャ、グアナコ、シカなどの野生動物を追いこむ猟なのだが、ビクーニャは殺さずに、毛を刈ったあとに生きてそのまま解放した。ビクーニャの毛は極めて上質で、皇帝と皇族の衣装を織るために使われた。このように、アンデスでは、古代から、野生動物を保全しつつ、一定の管理をしながら有効に利用するという、固有の「環境保全・利用システム」が発達していたのである。インカ帝国の崩壊とスペインによる植民地化により、そのシステムも消滅し、野生動物は乱獲により絶滅の危機に瀕していた。ところが、その「チャク」の現代版が、1993年からパンパ・ガレーラスで試みられて成功し、急速にアンデス全体に拡大しつつあるのだ。

2002年6月、筆者はペルー南部のアヤクチョ県の高原に位置するビクーニャ保護区パンパ・ガレーラスを訪れ、「チャク」の観察調査



写真1 囲いに追い込まれた野生動物ビクーニャ

を行った。パンパ・ガレーラスは、ペルー南部の海岸地方に位置する、地上絵で有名なナスカの町から、東のアンデス高地へ100キロほど上ったところに位置する。標高約4千メートルに広がる乾燥した草原で、そこからさらに数10キロ先に位置するルカーナス村に属す。



写真2 生徒が演じる太陽の乙女と兵士たち

<ビクーニャの祭>

筆者はルカーナス村に滞在して調査を行った。村で、ビクーニャの祭「グラン・チャク」が、6月23日夕方の前夜祭から始まった。村の広場に仮設のステージが建てられ、出店が並び、さまざまなフォルクローレ（民族芸能）の公演が行われた。

6月24日朝10時、ルカーナス村から祭りに参加する人々の車が次々と出発した。舗装道路をナスカ方向に30分ほど戻ったところに捕獲地点、つまりビクーニャを追い込む円形の罠（囲い）が設けられている。そこからさらに4km先が追い込みの開始地点であった。この日は、丘の上に登って追い込みの全容を見た。丘の上で、ココアの葉を山々や大地に捧げるパゴ（神々への供物）の儀礼を行ううちに、草原で追い込みが始まった。捕獲地点を要として扇状に展開するネットの外側に作られた長い人垣が、肉眼でわずかに見えた。丘から望まれる広大なパンパに広がる蟻の列のような線が動き始めたのである。

丘から下り、捕獲場所に到着すると、ちょうどビクーニャの群れが追い込まれたところだった（写真1）。数100頭のビクーニャがナイロン網の囲い中に閉じ込められていた。しばらくして、円形の囲いの中でインカの兵士や女性に扮した若者たちの踊りが始まった（写真2）。まもなく、輿に載せられた「インカ皇帝」が登場し、囲いの中央に作られて



写真3 太陽神に献杯する「インカ皇帝」（パフォーマンス）

いた石の祭壇の上に登った。インカに続いて「ニュスタ」（皇女）も祭壇に上った。雄雌のビクーニャが祭壇に上げられ、耳を切られ、その血を杯に注がれた。「インカ」は、杯を掲げてインティ（太陽）に捧げ、それを飲み干した（写真3）。それから数頭のビクーニャが素手で捕まえられ、地面に倒されてバリカンで毛が刈りとられ、その毛

が皇帝と太陽に捧げられた。

このパフォーマンスに出演しているのは、実はルカーナスのコレヒオ（中高等学校）の先生や生徒たちで、衣装も、先生と生徒のお母さんたちの手作りだそうです。



写真4 先生や生徒によるビクーニャの追込み

#### <学校のチャク>

6月24日に見たビクーニャ追込みは、観光客を巻き込んで「大チャク祭」として行われる特別のチャクであった。その3日後には、ルカーナス村の学校のためのビクーニャ追込みが行われた。

朝の9時頃から、生徒たちはトラック3台に分乗して、現地に集まった。罟のネットは前日に設置されていた。10時半、追いこみ隊がトラックに分乗し、ネットに沿って2方向に分かれて出発した。さらに、比較的近くの側面から追うグループが徒歩で出発した。筆者は徒歩グループに参加した。1時間後、ネットの側面で待機していると、人垣に遠巻きにされ、方向を失ってあちらこちらに疾駆するビクーニャの群が眼前に現れた。人々は色鮮やかな布片をつけたロープをもって群れを追込み、12時過ぎ、罟の要にあたる部分に群を追い込んだ（写真4）。

網の中に集められたビクーニャたちは、野生動物とは思えないほどおとなしかった。学生たちが素手でビクーニャを抱えて網から出すと、インヘニエロ（技師）たちが地面に押さえつけて手際よくバリカンで毛を刈る（写真5）。2、3分で毛を刈り取られたビクーニャは次々に解放される。



写真5 ビクーニャの毛をバリカンで刈ったあとと解放

学校の先生の話によると、学校のチャクは1999年に始められ、2002年で4回目とのことだった。前年は900頭を捕獲し、毛の販売によって、15,000米ドルほどの収入が得られた。その収入によって、学校の施設や備品（机・本・コンピュータなど）が大幅に改善されているという。先生が次のように語った。「ビクーニャ捕獲と祭りへ参加によって、子供た

ちは以前よりもコムニダ（コミュニティ）への愛着を持ち、その一員と感ずるようになりました。チャクをやる前に、教師は生徒たちにこの地域の歴史を教えます。そうすると、生徒たちはとてもよく学びます。教えたことだけでなく、長老たちに自分たちで話を聞いてきて、それについて話したりします。」

## 2 「チャク」復活の経緯と要因

インカ時代におこなわれていたチャクは合理的につくり上げられた野生動物の保全・利用のシステムであった。ビクーニャは生きたまま利用され、シカの場合も、ふつうのオスは食用とされたが、メスはそのまま解放された。また、種オスとして相応しい立派なオスも生きたまま解放された。捕獲された動物の数は、キープ（結縄）に正確に記録された。こうして、インカ皇帝の管理のもとに、野生動物が合理的に利用されるだけでなく、その保全と改良がなされていたのである。

インカ帝国がスペインによって征服された頃（1530年代）には約200万頭のビクーニャがいたと考えられている。しかし征服後、インカ帝国の崩壊とともに、チャクの習慣も消滅し、野生動物の無秩序な狩猟によってその数は激減してしまった。1965年に招聘されたイギリス人生物学者は、ペルーに棲息するビクーニャの数が1万頭に満たず、絶滅の恐れがあることを指摘した。調査の結果、アヤクチョ県ルカーナス郡にもっともおおくのビクーニャが棲息していることがわかり、翌1966年そのパンパ・ガレーラス高原に6500ヘクタールの最初の国立保護区が設立された。1972年からは、ドイツが、保護区のインフラ整備、武装警備隊による監視システムの設立などのための援助をおこない、個体数が次第に増加した。しかし、1980年代には極左テロ集団センデロ・ルミノソが保護区を攻撃し、ビクーニャ保護は再び停滞した。

一方、ペルーが1975年に批准したいわゆる「ワシントン条約」によってビクーニャの毛は商取引が禁止されていた。しかし、野生動物の「合理的利用」を求める交渉とビクーニャの個体数の増加により、「ワシントン条約」の付属書1（絶滅の恐れのある種で、商業目的の取引は禁止）から付属書2（商業目的の取引は可能だが、輸出許可書または証明書が必要）への移行が認められ、ビクーニャの毛の取引が許可されるようになった。

フジモリ政権下の1990年代になり、国内の治安が回復するとともに、1991年にはビクーニャの管理権を棲息地の農民共同体に付与する法律が制定され、ビクーニャの毛刈りが可能となった。その結果、各地にビクーニャ管理委員会が設立され、その全国組織としてSNV（全国ビクーニャ協会）が組織された。こうして、治安の回復とともに、1993年パンパ・ガレーラス保護区で最初のチャクが実施され、1994年ビクーニャの毛の国際的な取引が開始された<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 以上のビクーニャ保護運動とビクーニャの捕獲・商取引開始のプロセスは、主として[Wheeler, Jane C. and Domingo Hoces R. 1997, pp. 284-286]を参照してまとめた。

インカ時代には数万の民が動員されたが、現代では大規模な動員は難しい。そこで、草原にナイロン・ネットをV字型に張る罨が考案された。この新技術により、通常のチャクは数十名程度で実施できるようになった。

ペルー農業省の2000年の統計 (Ministerio de Agricultura 2001) によれば、全国の151のコミュニティで、約1万7千頭のビクーニャから3,427キログラムの毛が生産された。

むかしインカ王に献上されたビクーニャの毛は、今はヨーロッパなどに輸出され高級衣料として商品化されている。つまり、インカの伝統は、アンデスのグローバル化と市場経済化の下で再生したのである。安定したビクーニャ毛の生産のためには、資金と市場と流通経路が確保されなければ成り立たないからである。ビクーニャの毛は、ヨーロッパに輸出され、1着2万ドルもするスーツに加工されるのだという。

このように、チャクの復活の背景には、グローバル化、市場経済の浸透などがある。その他にも、様々な要因が複合的にからみあっている。フジモリ政権下で進められた、アンデス山岳地域の道路整備をはじめとする開発（開発の成果としてのインフラ整備、及び開発重視政策そのもの）、治安の回復などである。

こうしたさまざまな背景がととのったところに、インカの伝統の灯が再燃したわけである。1993年、パンパ・ガレーラス保護区に当時のフジモリ大統領を招いてチャクが実施された。同時に伝統的な民族舞踊の祭りが催され、以後、毎年6月24日に「大チャク」の祭りがおこなわれるようになった。

チャクは、先住民社会に、以前は想像もつかなかったほど大きな現金収入をもたらしている。ルカーナス村では、電気の敷設や学校の新築などの基盤整備が進んだ。ビクーニャの毛は1キロ当たり500ドル以上の価格である。チャクによって先住民社会に目に見えにくい重要な変化も起こっている。チャクの生産物の集積や輸出のため、先住民社会の全国組織が設立された。つまり、植民地時代に分断化が進んだ先住民コミュニティ間の横の連携が促されたのである。また、チャクの実施には実務能力の重要性が高まり、リーダーシップのあり方も変化している。

### 3 アンデスから学ぶもの—自然の多様でゆるやかな管理と利用

ビクーニャの毛の生産が、貧しいアンデス高地の先住民社会に、多大な収入をもたらすようになった。それが住民たちに、野生動物保護への大きなインセンティブを与え、絶滅の危機に瀕していたビクーニャの保全につながった。それによって、ビクーニャの重要性の認識が人びとの間に広まり、密猟が抑制され、現在その個体数が20万頭近くまで増加している。このように、インカ時代の伝統知が現代に蘇り、それがアンデスの先住民社会を大きく変えようとしている。さらに、その叡知が世代を超えて継承され始めている。このような地域に根づいた自然との共生の知恵には、深刻な環境問題や社会問題に直面している近代社会に生きるわたしたちにも、おおいに学ぶべきものがある。

私たちは、アンデスの「チャク」によって、野生動物を「殺さず」に、保護しながら、うまく管理し、合理的に利用できることを知った。それは、文化人類学的視点から言えば、従来の常識—野生動物は殺して食べるもの、すなわち狩猟の対象であって、家畜は人が「保護」するもの、すなわち牧畜の対象である—という、従来の常識を大きく覆すものであった。アンデスにおける野生動物と人とビクーニャのかかわりは、「狩猟」ともいえない、また「牧畜」ともいえない、いわば「自然の「ゆるやかな多様でゆるやかな管理と利用」とでもいえるような、もうひとつの自然=人の関係を想定させるものである<sup>2</sup>。

チャクは観光の対象ともなり、「地域興し」にも貢献している。さらに、はるかむかしに途絶えた歴史と伝統を地元の先生や生徒が学び実践するというかたちで、「伝統」の再編・復活と、失われた歴史の再評価が起こっている。生物多様性保全にも資するアンデス固有の伝統であるチャクが再生し、評価されたことで、それが、スペインによる征服以後ずっと蔑まれてきた先住民の栄光の歴史と文化の再評価につながったわけである。インディオ（先住民）にとって、それは失われた尊厳の回復を意味している。それが、彼らが自信を取り戻す契機となり、教育に活かされている。こうして、400年の時を経て固有の文化が再生し、しかもその世代間の継承も確立されたのである。

チャクの事例は、伝統文化に内在している、**local knowledge**（地域の知）、あるいは**indigenous knowledge**（在来の知）の大きな有効性を提示している。それが、アンデスの「伝統性」というより、近代化・グローバル化のプロセスの中で起こっているからである。すなわち、生物多様性（環境）の観点から、グローバル化によって世界が画一化に突き進むことの危険性を示し、同時にローカルな伝統知の有効性を提示し、現代社会における文化多様性の重要性とその維持の可能性をも示しているのである。

## おわりに

筆者が勤務する愛知県立大学の建物の屋上から、瀬戸市と長久手町にまたがる「海上（かいしよ）の森」がはるか彼方まで広がっているのが見える。その向こうの豊田市に矢作川が流れている。万博会場となったこの「海上の森」こそは、地域の人びとが、長い間「ゆるやかな多様で柔軟な管理」によって共生し利用してきた里山である。こうした里山の多くほとんどは、日本の近代化、ことに高度成長の中で、人の営みと切り離された。また、河川は、大規模な開発と近代的技術により、自然を管理する「治水」と産業のための「利水」などのために、護岸工事やダム建設によって、「硬い管理」にさらされてきた。

大河の流域に人類の文明が誕生したことからわかるように、河は人の営みにとって極めて重要なものであった。私たちは、それを自らの手で疎外してきてしまった。

豊かな共生の知が埋め込まれた在来の文化が消滅すれば、環境との共生が失われる。生

---

<sup>2</sup> 狩猟・牧畜二分論の再考については、拙著（稲村2007, pp.297-310）で論じた。

物多様性と文化多様性（環境と文化）の関係性を再確認し、在来の文化を世代間においても継承させていくことが重要である。

里山や川の管理・利用に見られるように、日本人の自然への態度は、近代化とともに大きく変わってきた。物質的に豊かな生活を求める以上、それは仕方がないことであろうか。私たちはもう後戻りはできないのだろうか。

ローカルな伝統知が現代にも有効であることをアンデスの事例が教えてくれたが、実は私たちの身近にもそのような例はある。環境社会学者の古川彰は、矢作川における実践を、ヒマラヤにおける「半栽培」の視点でとらえなおすことの有効性をみいだした（古川彰 2005：27-34）。矢作川では、流域の漁業組合が「環境宣言」をし、その取り組みの一つとして、「自然工法」を取り入れた護岸工事を試みられている（芝村龍太2005：35-39）。最近、鮎の遡上が回復したとも報じられている。

考え方ひとつによって、私たちの環境への態度、管理・利用のあり方は変えられる。在来の知を再評価し、そこから学ぶことは重要である。それによって、私たちの環境への態度を転換させ、もういちど自然を身近に取り戻すことができるのではないだろうか。

## 参考文献

- ・ 稲村哲也 2005「特集人と自然との共生 現代に甦ったインカの知恵」『季刊民族学』111：9-15
- ・ 稲村哲也 2007「アンデス発の牧畜起源論」山本紀夫（編）『アンデス高地』（京都大学出版会）、297-310頁
- ・ 芝村龍太 2005「特集人と自然との共生 水産資源の持続的利用を目指して」『季刊民族学』111：35-39
- ・ 古川 彰 2005「特集 人と自然との共生 ヒマラヤから矢作川へ—半栽培とやわらかな自然とのかかわり」『季刊民族学』111：27-34
- ・ 山本紀夫 1992『インカの末裔たち』日本放送出版協会
- ・ Wheeler, Jane C. and Domingo Hocés R. 1997 “Community Participation, Sustainable Use, and Vicuña Conservation in Peru.” In *Mountain Research and Development*, Vol. 17, No. 3, pp. 284-286